

# フィリップ善良公の私的信仰

## —ハーグ、ミュンヘン、パリの3写本にみる トマス・アキナス祈祷文とイメージの関わり

### Philip the Good's Private Devotion and Thomas Aquinas' Prayer: An Analysis of Image Text Relationship in Three Illuminated Manuscripts of the Duke of Burgundy in The Hague, Munich and Paris

黒岩三恵  
KUROIWA Mie



写本彩飾、フィリップ善良公、ジャン・ミエロ、ジャン・ル＝タヴェルニエ、  
トマス・アキナス  
manuscript illumination, Philip the Good, Jean Miélot, Jean Le Tavernier,  
Thomas Aquinas

#### Abstract

The Hague Book of Hours of Philip the Good, Duke of Burgundy (KB ms.76 F 2), illuminated in grisaille by the workshop of Jean Le Tavernier and copied by the duke's secretary and scribe Jean Miélot c.1455, contains a miniature of the Baptism of Christ that curiously illustrates a prayer of Thomas Aquinas. In an attempt to explain the peculiar text-image combination, we compare the Hague Hours with two less well known manuscripts in Philip the Good's possession: the Tiny Prayer Book in Munich (BSB cod.Gall.40) and a moral treatise in Paris (BnF Fr.12441), partially translated from Latin and compiled with other texts in 1456 by Miélot and illustrated by the workshop of Le Tavernier. A comparison of the Munich prayer book and the first fifty folios of the Hague Hours reveals a nearly identical content of the two manuscripts, in text as well as in iconographical program, and suggests that the image of the Baptism of Christ in the Hague manuscript was copied from the Munich manuscript made a decade earlier—or from another unlocated manuscript of an yet earlier date in which the choice of the Baptism of Christ was originally made. Whereas a reading of successive miniatures as a series implies that the image of Baptism of Christ, with Throne of Mercy preceding it and Saint Barbara near the Tower after it, is meant to represent the Trinity, the exact nature of the image-text relationship still needs to be explained. The Parisian moral treatise casts some light to the way in which Philip the Good used the prayer of Thomas Aquinas. Placed at the very end of the manuscript, albeit without illustration, the Aquinate's prayer serves as an epilogue to a collection of moralities of living well and dying well, and testifies to the importance it had in the duke's private devotion.

## 1. はじめに

歴代のヴァロワ家ブルゴーニュ公による愛書活動は、カペー朝に遡るフランス、ヴァロワ王家の伝統に加え、代が下るにつれて一層顕著となるネーデルラント南部出身の画家や文筆家の重用による、ブルゴーニュ公国の精華と呼ぶにふさわしい量と質を備えるに至った。それは、フィリップ善良公が戦乱に明け暮れた統治に終止符を打つ1440年代以降、1467年の彼の死去を経て1500年前後まで、一気に開花したかのような瞠目すべき展開を見せることは周知のとおりである。

今日ハーグのオランダ国立図書館が所蔵する通称《フィリップ善良公の時禱書》は<sup>1)</sup>、フランス的な伝統とより新しいフランドル的な伝統が融合した彩飾写本の代表作として名高い(写本番号 ms. 76 F 2。以下同写本は、上記通称のほかハーグ写本または ms. 76 F 2 と表記することがある)<sup>2)</sup>。この時禱書は、1449年から67年までブルゴーニュ公の秘書を務めた翻訳・著述・能書家ジャン・ミエロが筆写したテキストと西フランドル、オーデナルトを拠点に活動したジャン・ル＝タヴェルニエ工房の挿絵を掲載し<sup>3)</sup>、15世紀半ばの様式的な特徴を示す(図1)。グリザイユ彩色による挿絵の中に<sup>4)</sup>、繰返しフィリップ善良公自身の肖像が認められることを手がかりとして<sup>5)</sup>、早くから1455年付けのブルゴーニュ公からジャン・ル＝タヴェルニエのグリザイユ画への支払い記録と関連づけられ、同記録に記載の「フィリップ殿の時禱書」と同定する仮説が提起されてきた<sup>6)</sup>。しかし同時に、同会計記録と同写本との内容の齟齬から、1455年の記録とは無関係とする反論も長らく提示されている<sup>7)</sup>。

本稿では、ハーグ写本冒頭に掲載された、トマス・アクィナスの祈禱文「授け給え慈愛たる神よ(Concede michi Misericors Deus)(以下、トマス祈禱文または Concede michi と表記)およびその挿絵の特異な主題〈キリストの洗礼〉を中心に簡単な考察を行う<sup>8)</sup>。すでに、トマス祈禱文とその彩飾について、確認された写本資料の概観的な紹介に続き、パリ、アヴィニョン、ロンバルディア地方で制作された数点の私的祈禱文集・時禱書写本について個別的な考察を試みてきた(黒岩 2014, 2016, 2018)。これらの写本と比較しても、ms. 76 F II が注目されるのは、以下の二つの点による。

一つは、上述したように、類例がないキリストの洗礼という主題が持つ特異性が指摘される。とりわけ興味が惹かれるのは、テキストとイメージの関係の観点から考えて、トマス祈禱文が洗礼一般やキリストの洗礼と直接結びつく内容を持っているわけではない点である<sup>9)</sup>。キリストの洗礼をあえて挿絵の主題に選択したのはなぜなのか。祈禱文テキストを補完ないしは注釈する機能が挿絵に付与されていたとするならば、その補完・注釈の内容は何であり、典拠は何なのだろうか。

もう一つは、『フィリップ豪胆公の大時禱書』<sup>10)</sup> や『ベリー公のいとも美しき時禱書・トリノ＝ミラノ時禱書』のごとき<sup>11)</sup>、フィリップ善良公の祖父フィリップ豪胆公や大伯父達、すなわちフランス王シャルル5世、ベリー公ジャンの世代に遡るミサ典礼書を加えた大掛かりな時禱書制作の事業との関係である。フィリップ善良公は、祖父『フィリップ豪胆公の大時禱書』を相続した

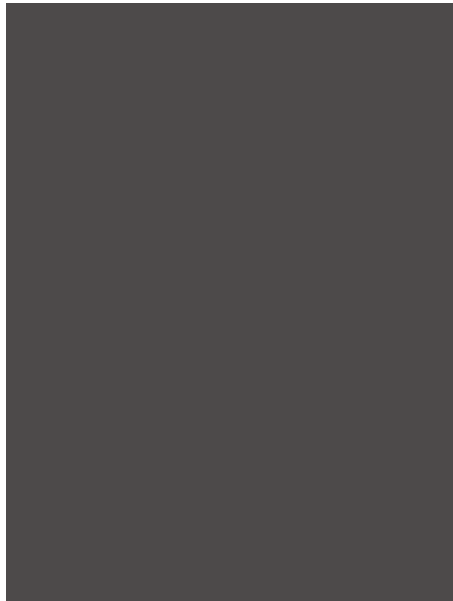


図 1. ジャン・ル＝タヴェルニエの助手〈聖顔布を広げる聖ヴェロニカ〉『フィリップ善良公の時禱書』、1455 年頃 オランダ国立図書館、ms. 76 F 2, fol. 1. (Koninklijke Bibliotheek, Nederland)

後、細心な後補を加えていることが先行研究によって指摘されている (Wijsman 2010a)。そして、本稿の考察の対象であるハーグ写本研究の最近の動向として、『トリノ＝ミラノ時禱書』を筆頭として新たな知見が公刊される中で (Van Buren 1996)、ハーグ写本<sup>12)</sup>の素性についても、新しい視点から仮説が提出されるようになってきている (Krinsky 2014, Rochmes 2015, Rudy 2016)。特に、ロックメスは、2015 年に提出した博士論文およびそれに基づく雑誌論文において、『トリノ＝ミラノ時禱書』との比較から、『フィリップ善良公の時禱書』は、ミサ典礼書＝時禱書に追加する目的で制作された折丁の一群とする仮説を提起した (Rochmes 2015, 2015–2016)。したがって、ハーグ写本の研究に当たっては、1370 年代以来のミサ典礼書＝時禱書の系譜に同写本を置き、祈祷文テキストの選択という文献学的な観点と挿絵にみる図像プログラムの伝承 (の有無) の双方から詳細に分析を行うことが必要だということになるだろう。

本稿では、ハーグ写本と『フィリップ豪胆公の大時禱書』や『トリノ＝ミラノ時禱書』との関係を念頭に置きながら、善良公にとっての私的信仰の実践の様相について、以下のような絞った観点から考えてみたい。すなわち、ハーグ写本におけるトマス祈祷文 *Concede michi* を含む祈祷文の部分を取り上げ、最近確認できたフィリップ善良公が所有した 2 点の彩飾写本を比較作例として、*Concede michi* を含む、いくつかの特定の祈祷文の読まれ方、イメージとの関係、キリストの洗礼図像の持ちうる意味についての一つの解釈を提示するつもりである。

## 2. ハーグ写本の概要：巻頭の祈祷文と彩飾を中心に

豊富な先行研究に加え、複数の制作時期を経て今日の姿を取るに至ったハーグ写本の全容については紙幅の関係もあり、本稿では紹介することはかなわない<sup>13)</sup>。この節では、先行研究による写本学的知見を参照しながら写本の概要を提示したのち、トマス祈祷文が含まれる、写本巻頭部分 (fols. 1-53v) に絞って取り扱うこととする (論文最後の【附録1】も参照)。

ハーグ写本は、獣皮紙の寸法約 270 × 190 mm、テキスト欄 1 列、ページ当たり 20 行と時禱書としては比較的大型である<sup>14)</sup>。現在、327 葉によって構成され、ジャン・ミエロによる写字、ジャン・ル＝タヴェルニエと助手の手によって 1450 年代に彩飾された部分と、およそ半世紀後の 1500 年前後に、第 2 の写生字による写字とヘント＝ブルツヘ派に属する通称「1500 年頃の祈祷書写本の画家」によって彩飾された後補部分によって構成されている。もともとはフィリップ善良公のために制作されたことが、fol. 20 の磔刑像への祈祷文、fols. 41v、43v、44v の 3 編のミサの祈祷文、fols. 45v、48v の聖母への祈祷文 2 編、fol. 282 のキリスト受難の祈祷、fol. 299 聖母への祈祷の 8 点の挿絵画中に描かれた跪拝する善良公の像から明らかである<sup>15)</sup>。ハーグ写本内の追加された折丁や葉を除くと、当初は 200 葉程度が時禱書に含まれていたと推定される (Korteweg 2002、760)。時禱書の内容は、1500 年前後の後補である典礼曆に続き、祈祷文、週の曜日の時禱、聖母の小時禱、悔悛詩篇と連禱、死者のための聖務、聖人請願、祈祷文となる<sup>16)</sup>【附録1】。トマス祈祷文および挿絵〈キリストの洗礼〉の収録は、巻頭近い一群の祈祷文が掲載された部分 (fols. 1-53v、折丁 III から IX) で<sup>17)</sup>、fol. 18 に挿絵と赤色標題を掲載し、以下、トマス祈祷文テキストが fol. 18v から 19v まで続く (図 2)。

巻頭に各種の祈祷文を掲載する時禱書の形式は、巻末に近く掲載するパリ使用式を筆頭とするフランスにおける使用式とは異なるが、ブルゴーニュ公国においては一般的である。くわえて、コルテウェフが分析したように、折丁とフォリオの順番を整理する 3 種類の符牒によって、後年乱丁が生じた可能性が低いことを示唆される (Korteweg 2002、768-770)。したがって、現状のフォリオ配置がフィリップ善良公がハーグ写本を用いた当時のままであると見なすのが妥当と考えられるが、実際、キリストの聖顔の祈祷が、大ぶりのキリストの聖顔布を手にした聖ヴェロニカを描いた挿絵に導かれて掲載されているのは (図 1)、巻頭にふさわしい<sup>18)</sup>。

以下、fol. 53 までの祈祷文には、多くがテキスト欄の 3 分の 2 程度の幅の比較的小さな挿絵が、繊細な様式と線描性によって、タブロー画的な力強い造形性を特徴とするジャン・ル＝タヴェルニエ自身の様式と識別可能な助手によって描かれている (図 1-3)。聖母の小時禱以下各種時禱をテキスト欄幅の大型の挿絵に描くのがジャン・ル＝タヴェルニエ自身に帰せられるのに比較すると、写本の彩飾のヒエラルキーの中で祈祷文とその挿絵の扱いが二次的にみえるのは一面では正しい。しかし、上述のように、フィリップ善良公の肖像 8 点のうち、6 点が fol. 53 までの祈祷文の小挿絵内にあることを考慮すれば、ハーグ写本巻頭の祈祷文がその所有者にとって極めて親密な意味を持ち、聖母の小時禱や死者のための聖務と同様に重要であったことがうかがえる。



図2. ジャン・ル＝タヴェルニエの助手〈磔刑のキリストに向かって祈るフィリップ善良公〉『フィリップ善良公の時禱書』1455年頃、オランダ国立図書館、ms. 76 F 2、fol. 20. (Koninklijke Bibliotheek, Nederland)

さて、その巻頭の祈禱文の選択と配列、挿絵主題の選択にはどのような意図があるのだろうか。その意図を明確に解明するには、依然祈禱文の文献学的な調査などの課題を残すが、現時点において指摘できるのは次のようなことである。本稿末尾の【附録1】に一覧化したように、祈禱文と挿絵に、複数の何らかのまとまりが認められる。まず目を惹くのが、fol. 10から13までの〈受胎告知〉以下5点の聖母伝から取材した挿絵である。その多くが聖母の小時禱の定型図像に一致し（例えば、fol. 10とfol. 116、fol. 11とfol. 129vなど）、そのために聖母の小時禱に見られるよ



図3. ジャン・ル＝タヴェルニエの助手〈キリストの洗礼〉『フィリップ善良公の時禱書』、1455年頃、オランダ国立図書館、ms. 76 F 2、fol. 18. (Koninklijke Bibliotheek, Nederland)

うな一体的な印象を見る者に印象づける<sup>19)</sup>。各々の祈祷文は、聖母への称賛や聖母の庇護を請願する聖母祈祷文であり、個々の独立と同時に祈祷文が唱えられる聖母という受信者の共通性によって一つのまとまりを持っていると捉えられよう。

さらに、fols. 21vから33には、〈エルサレム入城〉から〈復活〉まで、キリスト受難伝が11点の挿絵連作として挿入されている。図像的なまとまりがあることは明白であるが、祈祷文を検討すると、より複雑な様相がうかがえる。F. 21vからfol. 26〈十字架の道行き〉の挿絵が添えられた祈祷文までは、カンタベリーの聖アンセルムに帰せられたイエス・キリストへの請願祈祷文のフランス語訳となっている【附録1】。ところが、fol. 27からは、教皇グレゴリウスの贖宥が得られ、尊師ベダが十字架上のキリストの言葉に因んで作詞した祈祷文に続き、四旬節から聖週間にかけての祈祷や、〈十字架降下〉に続く三位一体を記念する祈祷文（fols. 30 sq.）とラテン語のテキストが続いたのち、〈キリストの埋葬〉〈復活〉では再び俗語の祈祷文が掲載される【附録1】。俗語とラテン語が混在するこれらの祈祷文の典拠や、ハーグ写本における配置と挿絵主題の選択の意図については、さらなる調査が必要である。特に、キリストの受難伝の挿絵群を個別の祈祷文をつなぐ横糸のように配置する図像プログラムは、時禱書の各種時禱をつなぐ古典的な手法に近いが、その考案者の問題も含めて、今後、さらに調査を重ねたい。

ひるがえって、筆者の関心を引くトマス祈祷文とその挿絵〈キリストの洗礼〉に関して、祈祷文がfols. 18-19vという位置に配置されていることや、前後の祈祷文との関係については、どのように見ることができだろうか。トマス祈祷文の前には、〈恩寵の座〉の挿絵とともに<sup>20)</sup>三位一体に関わるアタナシウス信条の全文が掲載される。アタナシウス信条と三位一体を表す図像である〈恩寵の座〉と、これに続く挿絵〈キリストの洗礼〉との関係は明らかである。四福音書が伝えるように<sup>21)</sup>、イエスがヨハネによって洗礼を受けた時、聖霊が下って天の神の声イエスをわが愛する子と宣言したことが、三位一体の表明と見なされるからである<sup>22)</sup>。

次に、トマス祈祷文と挿絵の後に続く、聖バルバラへの請願とその挿絵は（fols. 19v-20）もまた、三位一体と関係する。聖バルバラ伝が伝えるところによれば、決められた結婚を承知しないバルバラに業を煮やした父親によって二つの窓がうがたれた塔に綴じ込まれた聖女は、幽閉中に密かに受洗をし、三位一体を表す意図をもって三つ目の窓を塔につけたという<sup>23)</sup>。ここから、挿絵をシリーズ的に捉えたときに三位一体という共通の主題のもとに祈祷文がまとめられていることが推定される。

ハーグ写本の巻頭の祈祷文の編集方針と図像プログラムの決定については、依然解決すべき課題が多く残るが、最初に聖顔への祈祷、次いで三位一体に関係する祈祷、聖母への賛美と請願の祈祷、キリストの受難に関連する各種の祈祷、ミサの際に唱えるべき祈祷といういくつかの区分が設けられ、トマス・アキナス作詞の祈祷文のほか、ベダ、カンタベリーのアンセルムス、ベルナルドゥスらによる祈祷文が採用されていることがわかる。トマス祈祷文は、その他の権威ある神学者たちに交じって掲載され、上述した14世紀半ばに本格化するミサ典書と時禱書を組み合わせる野心的な時禱書の制作事業を継承する側面が認められる。トマス・アキナスにだけ

注目することは全体の編集方針を見失いかねない危険があることを承知しつつ、やはり興味を惹かれるのはトマス祈祷文にキリストの洗礼の挿絵をつけるという発想の源泉がどこにあるのか、という点についてである。

### 3. バイエルン州立図書館蔵『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷文集』

前節において最後に指摘した、トマス・アクィナス祈祷文と〈キリストの洗礼〉図像の組み合わせは、14世紀から16世紀にまたがるフランス、イタリア、スペイン、ドイツの時禱書・私的祈祷書の中では特異であることはすでに述べた。しかし、同様の組み合わせをした他の作例を最近確認することができた。この節では、ハーグ写本との比較を主眼に、その写本『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷文集』について取り上げることにしたい（図4、5）【附録2】。

今日ミュンヘンのバイエルン州立図書館（以下、BSB）が所蔵するフランス語写本 Cod. Gall. 40 『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷文集』（以下、ミュンヘン写本、Cod.Gall. 40 と表記）は<sup>24)</sup>、38点の挿絵のうち4点がウィレム・ヴレランによって描かれていること、残りが1430年代まで活躍したブシコーの画家やベッドフォードの画家の様式的な影響をとどめ、3巻本『フィリップ善良公のエノー年代記』（Cockshaw & Van den Bergen-Pantens 2000）の第1巻の彩飾に関わった画家によることから、主として挿絵の様式の観点から研究がなされてきた（図4）<sup>25)</sup>。バイエル

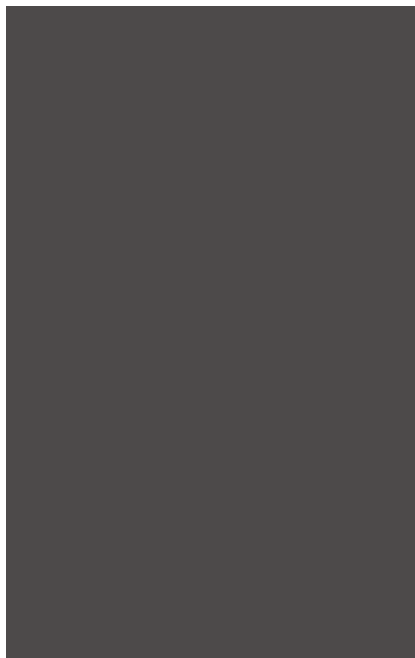


図4. いとも小さき祈祷文集の画家〈キリストの洗礼〉『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷文集』、1445年頃、バイエルン州立図書館、cod.Gall. 40, fol. 65v. (Bayerische Staatsbibliothek)

ン州立図書館のデジタル・ライブラリ上において電子版が閲覧可能であるが、実地検査による写本学的な調査が待たれる状況にあり、正確な寸法も明らかではない。1列のテキストコラムに12行の罫線が引かれ、ウェブサイト上の電子版から受ける印象では、高さは5cmから7cm程度の極めて小型の祈祷文集写本である<sup>26)</sup>。

Fol. 22において、図像入り彩飾イニシャル内に跪拝しながら挿絵の大天使ミカエルを見上げる黒衣のフィリップ善良公が、バ・ド・パージュにはクレスト飾りの兜を含む大紋章が金の羊毛騎士団の首飾りも含めて描かれている。また、fol. 72には、十字架上のキリストに向かって跪拝する、黒衣に金羊毛騎士団の首飾りを見につけた善良公像が描かれている(図5)。このことから、ミュンヘン写本の制作年代は1430年をテルミヌス・ポスト・クエムとする<sup>27)</sup>。ブシコー様式ついでベッドフォード様式の色彩を残すことから、1430年代に両画家の流れを引く凡庸な彩飾がなされたと思いたいが、フィリップ善良公の顔貌が比較的高齢に描写されていることもあってか、先行研究では、1445年頃(Van Buren, 2000)、あるいは15世紀の第3四半期(Smeyers 2012)と遅く推定する傾向が認められる。今後写本と彩飾の精査が必要だが、電子版で閲覧した印象では、さし当たってはヴァン・ビューレンにしたがって1445年頃の制作とする方が妥当だと考えられる。

さて、ハーグ写本【附録1】とミュンヘン写本【附録2】を比較すると、両写本の巻頭からの挿絵の主題選択ばかりではなく、祈祷文の選択もまた若干の相違を除外すればほぼ同一であることが明白である。ミュンヘン写本そのものがハーグ写本の底本となったとは限らないが、1445年頃から善良公が肌身離さず携行していたであろうミュンヘン写本の祈祷文を、約10年後に大判のハーグ写本へと忠実に再現したと考えられる。ミュンヘン写本の彩飾は、1420年代のパリの様式の残存が示すように、新しい祈祷書の編集構想を打ち出した最初の作例であるとは考えにくい。むしろ、先行する一つないし複数の写本を手本として携帯用の豆本形式に改めたと推定が可能ではないか。1440年代前半以前の現在未確認または現存しない写本において、トマス祈祷文と〈キリストの洗礼〉図像の組み合わせが考案された可能性は捨てがたい。とは言え、ミュンヘン写本の末尾近くでは、聖母への祈祷文が終わり、数葉の空白のフォリオの中の見開きページに、それまでの本文テキストの筆跡とは異なる筆跡の写字生によって、トマス・アキナスへの聖人請願の式文が書き込まれている(fol. 349v-350)。ミュンヘン写本では、fol. 319からfol. 337vにかけて、三位一体、大天使ミカエル、洗礼者ヨハネ、福音書記者ヨハネ、ペテロとパウロら、ローマ使用式の聖人17名の請願が挿絵なしで収録されている(電子版およびBousmanne 276, 2-9)。聖人の中に二人のヨハネが数えられることは、フランドルにおける両聖人に対する崇敬のほか、フィリップ善良公の父、ジャン無畏公の蔵書からの継承を推定させる<sup>28)</sup>。トマス・アキナスへの請願がミュンヘン写本に追加された年代について今後詳細な分析を行いたいと考えているが、この写本の構想には、托鉢修道会、特にドミニコ会の関与を仮定することが可能であるように考えている。トマス・アキナス祈祷を〈キリストの洗礼〉組み合わせ、三位一体と関わりがある一群の祈祷文とシリーズ化する構想力を持つ者は、祈祷文と神学に通じている者と考えるほかな



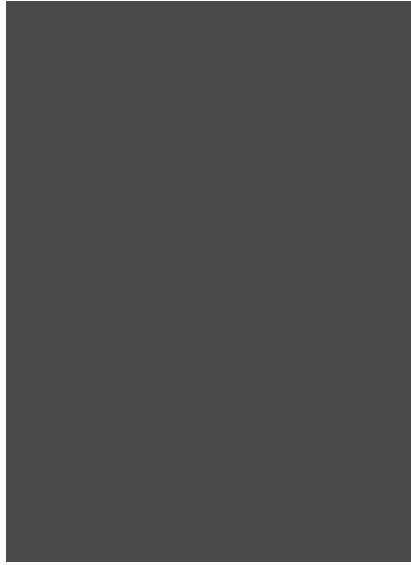


図 5. いとも小さき祈祷書の画家〈磔刑のキリストに向かって祈るフィリップ善良公〉『フィリップ善良公のいとも小さき祈祷文集』、1445 年頃、バイエルン州立図書館、cod. Gall. 40, fol. 72v. (Bayerische Staatsbibliothek)

いからである。

#### 4. ジャン・ミエロ編訳『古の哲学者たちによる道徳論集』

この第 4 節では、フィリップ善良公に関わる第 3 の写本として、ハーグ写本を筆写したジャン・ミエロがラテン語本文を俗語に編訳し、巻末にトマス祈祷文を収録する、フィリップ善良公に献呈された『古の哲学者たちによる道徳論集』を取り上げる<sup>29)</sup>。この写本からは、平信徒の私的信仰や道徳の涵養にあたってどのような実践を行ったのか、テキストの構成と内容から推定することが可能と期待できる。

フランス国立図書館 BnF Fr. 12441 『古の哲学者たちによる道徳論集 Livre de moralite』(以下、フランス写本、『道徳論集』または Fr. 12441 と表記) は<sup>30)</sup>、fol. 1rv の序文で明らかにされているとおり、フィリップ善良公のために 1456 年にリールで筆写されたことが確実で、fol. 44 の挿絵〈祭壇に向かって祈るフィリップ善良公〉にみる黒衣とドヴィーズからも献呈先が明らかである(図 6)<sup>31)</sup>。その一方、テキストの筆跡はミエロ直筆とは筆線の厚みやアルファベットの b、d、l などの字形に違いがあり(図 1 と 6 を比較)、リールにおいて他の写字生が写字を行ったと考えられる。写本の寸法は約 27 × 20 cm で、ミエロ写字の写本の定型と一致し、ハーグ写本『フィリップ善良公の時禱書』にも近い。内容は、序文以下、伝コンシュのギレルムス著『哲学者たちの道徳的な教訓』(*Moralium dogma philosophorum*) のミエロによる編訳「道徳の書」、キリストの受難をめぐる 7 つの時課についての論、アルファベット順のキリスト教的な格言集、正しい

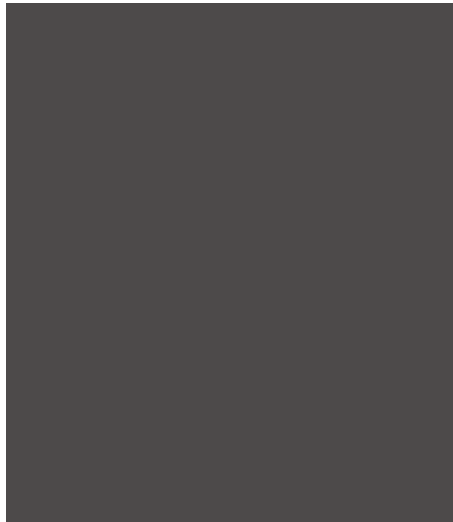


図6. ジャン・ル＝タヴェルニエ工房〈祭壇に向かって祈るフィリップ善良公〉ジャン・ミエロ訳編『古の哲学者たちによる道徳論集』、1456年、フランス国立図書館、BnF Fr. 12441, fol. 44. (Bibliothèque nationale de France)

死に方に関する小論や祈祷でいったん締めくくられた後、クレルヴォーのベルナルドゥス作詞の聖母に関する小論、そしてトマス祈祷文 *Concede michi* で締めくくられる【附録3】。この『道徳論集』の彩飾は、4点の挿絵と大小のシャンピ・イニシャルによって構成される。巻頭扉絵〈書斎のジャン・ミエロ像〉(fol. 1)、〈眠る筆者と討論する11人の哲学者たち〉(fol. 11)、〈祭壇の前で祈るフィリップ善良公〉(fol. 44) (図6)、〈キリストの受難〉(fol. 45)は、様式上の些かの相違が認められるもののジャン・ル＝タヴェルニエ工房がすべて制作したと判断される<sup>32)</sup>。このように、多作であったミエロの活動の中でも、『道徳論集』写本とハーグ写本は相前後する時期に同一の彩飾画家とともに制作した写本だということがわかる。

『道徳論集』のテキスト内容に戻ると、ミエロがフィリップ善良公が読者であると想定して編んだ道徳的小論・祈祷集で、良い生活態度、身の処し方から始まり、キリストの受難のプロセスを逐一観想中に追体験し、臨終の床にある病人を看取る際の祈祷や儀礼を執り行い、自らを反省し、来るべき死に備える生活と信仰の実践を指南する書であるように読める【附録3】。15世紀後半のブルゴーニュ公の宮廷における私的信仰の実情については、ジャン・ミエロのその他による宗教的な内容を有する著作の調査を含むより包括的な研究を必要とする。研究の途中経過としての結論めいた感想となるが、『道徳の書』の最後に、グリエルモ・ディ・トッコ『聖トマス・アクィナス伝』が伝えるところによれば<sup>33)</sup>、ナポリ滞在時のトマス・アクィナスが早朝に一人起床して礼拝堂に掲げられた磔刑像に向かって、我が身の修練に力添えを請う主旨のトマス祈祷文が掲載されていることは、この祈祷文の唱えられる状況を具体的に示唆する点で重要である。

## 5. ブルゴーニュ公の私的信仰活動における トマス・アキナス作詞の祈祷文の意味

同時に、同じ1455年頃という時期にジャン・ミエロとジャン・ル＝タヴェルニエという同一人物たちによって制作されたハーグ写本では、三位一体への含意を持つ〈キリストの洗礼〉とともにトマス祈祷文が収録されていたことを思い出そう。中世末期の時禱書・祈祷文集写本において、祈祷文と独立したり結びついたりする挿絵の機能、巡礼バッジの祈祷書ページへの縫い付け等を伴う接触的な信仰の実践とイメージの協働、写本を手にする祈祷者の身振りなど、多様なテキスト、イメージ、パフォーマンスの複合を通じて、日常の祈りと信仰活動シンボル性豊かに実行されるきっかけであったことは、すでに先行研究によって指摘されている<sup>34)</sup>。本稿で取り扱ったハーグ写本『フィリップ善良公の時禱書』、ミュンヘン写本『フィリップ善良公のいと小さき祈祷文集』、ジャン・ミエロ編訳『古の哲学者たちによる道徳論集』は、ブルゴーニュ公フィリップ善良という一人の読者、芸術庇護者に向けて制作された書物であり、今後、中世末期のネーデルラントの豊かなイメージ文化の中により具に位置づけてゆくことにしたい。無論、ハーグ写本やミュンヘン写本とより古い『フィリップ豪胆公の大時禱書』や『トリノ＝ミラノ時禱書』の関係を検討し、トマス祈祷文のブルゴーニュ公の宮廷における需要の変遷の問題も明らかにしなければならない。トマス祈祷文とキリストの洗礼が結びつけられた作例がネーデルラント南部、フィリップ善良公の治世に限定されることから、善良公の宮廷文化に特有のテキストとイメージの結びつきであることは疑いがない。善良公が重用した多数の知識人や著述家たちを含めて、今後調査を進めてゆきたい。

(本研究は、JSPS 科研費 JP19K00200 の助成を受けたものです。)

### 注

- 1) 当ハーグ写本の来歴は以下のとおりである。モンズ、サント＝ヴォドリュ聖堂参事会会員ド・モンフォール嬢の歿後競売でベルギーの歴史家・写本蒐集家ジェラルが購入。1814年、ジェラル死去に際し未亡人からオランダ国王ウィレム1世が収集品を一括購入、王立文書館に収蔵。1832年以来オランダ国立図書館に移管(以上、オランダ国立図書館のウェブサイト：<https://www.kb.nl/en/themes/middle-ages/book-of-hours-of-philip-of-burgundy> (2019年10月30日アクセス))。ド・モンフォール嬢に関しては、サント＝ヴォドリュ聖堂参事会カルチュレルによれば、1704年および07年に前任者の死去に伴い聖職禄をスペイン王フェリペ[5世]から授与されたマリー・ニコラシーナ・テレーズ・フィリポット・ジョゼフ・ヤサンス・ド・メロッド＝モンフォールと同定可能と考えられる。Chartes du chapitre de Sainte-Waudru de Mons, T. 4, pp. 605, 609, 619, 707, 740 参照。この人物は、1789年に死去している。ロベール・カンパン《メロッド祭壇画》等に名を遺すベルギーの名門の一員であるが、どのような経路によってハーグ写本がメロッド＝モンフォール参事会会員の手へ渡ったのかについては目下不明である。ハーグ写本の電子版のウェブサイトについては、以下註2参照。

- 2) オランダ国立図書館ウェブサイトにおけるハーグ写本の電子版は、<https://galerij.kb.nl/kb.html#/nl/bourgondie/page/0/zoom/3/lat/-58.63121664342478/lng/-10.72265625> (2019年11月5日アクセス) を参照。
- 3) ジャン・ル＝タヴェルニエの略歴と作品については、*Miniatures flamandes* 2011, 212-237 参照。
- 4) ジャン・ル＝タヴェルニエら 15 世紀後半のネーデルラントの彩飾画家におけるグリザイユについては、*Rochmes* 2015-2016, *Dubois* 2018, *Watteeuw & Van Bos* 2018 参照。
- 5) フィリップ善良公の挿絵があるフォリオについては、以下 4 頁参照。
- 6) 最初に翻刻を公開したのは Laborde (1851), pp. 217-218, no. 4021 である。リール文書館 1454 年 4 月 4 日付とあるほか文書番号等の書誌情報は記載がない。1882 年にドエーヌが公刊した文書は、ドエーヌ自身やコーテウエフが指摘するようにラポルドが刊行した文書と日付や文書の内容に若干の相違が認められるが同一と目され、文書番号はノール県立文書館リール会計院文書 1445 年 4 月 4 日付 B. 2018 (1) である。Dehaisnes (1882), pp. 32-34 また Korteweg (2002), p. 759 参照。B. 2018 文書は、1454 (グレゴリオ暦 1455) 1 月 1 日から 12 月 31 日までの 42 通の通達文書を収容するフォルダである。Dehaisnes (1881), pp. 200-201, B. 2018 参照。
- 7) Korteweg 2002, *Rochmes* 2015-2016.
- 8) この主題に関しては、2014 年 12 月開催の立教大学新約聖書画像研究会 NTIS 例会において最初の口頭発表を行った。コメントをくださった各位に感謝申し上げたい。
- 9) トマス・アクィナス作詞の祈祷文の翻刻は、黒岩 2014、およびウェブサイト *Corpus Thomisticum* [URL : <http://www.corpusthomicum.org/d04.html> (2019 年 11 月 3 日アクセス)] 参照。同祈祷文のフランス語訳は、*Le Brun-Gouanvic* 2005, 78-79.
- 10) ケンブリッジ大学フィッツウィリアム美術館所蔵の ms. 3-1954 部分については、同美術館電子カタログを参照のこと (含む参考文献) : <http://data.fitzmuseum.cam.ac.uk/id/object/170618> (2019 年 11 月 3 日アクセス)
- 11) 『トリノ＝ミラノ時禱書』については、膨大な先行研究があるが、*Van Buren, Marrow, Pettenati* 1996 および *ベスフルグ&ケーニヒ* 2002 参照。
- 12) 時禱書と祈祷集の定義については、拙論 (黒岩 2014) 参照。
- 13) 先行研究については、上記註 4、7 のほか、オランダ国立図書館の彩飾写本データベースのウェブサイト « *Medieval Illuminated Manuscripts* » 中、ms. 76 F 2 の参考文献ページで、2016 年までの研究一覧も参照。[ <http://manuscripts.kb.nl/search/literature/76+F+2> ] (2019 年 11 月 3 日アクセス)
- 14) サイズ選択の理由として、ジャン・ミエロが写字を手掛ける際の定型である寸法が時禱書でも適用されたとする解釈と、祖父『フィリップ豪胆公の大時禱書』に倣ったためとする解釈の二つが提示されている。Korteweg 2002, 758.
- 15) 8 点の挿絵の善良公像は、短髪、金の羊毛騎士団の頸飾りのほか、fol. 48v の挿絵の枠の上部には公のドヴィーズである火打石とモットー *Autre nauray* が、fol. 299 の枠上部にはモットーのみが描き込まれ、同定が確実である。また、Korteweg 2002, 760 は、fol. 116 〈受胎告知〉の枠の下部にも火打石とモットーが描かれていることを指摘している。
- 16) より詳細な写本学的な知見は、Korteweg 2002、特に 760-762 ページ参照。
- 17) Korteweg 2002、761 に拠る。

- 18) モーガン・ライブラリ&ミュージアム蔵 ms.M. 421 を中心にフランドルにおける聖顔布崇敬については、Smeyers 1995 特に p. 200。同頁註 22 では、聖顔布とリエージュの聖女ジュリアンヌ・ド・モン＝コルニヨンとの関係に言及がなされている。トマス・アクィナス図像との関係を含めた、ネーデルラントにおける聖体信仰とトマスの関りについて今後研究を進めてゆくにあたり、同地域における聖顔布信仰は重要な糸口になると判断される。
- 19) ハーグ写本電子版については、上記註 2 参照。
- 20) 玉座に座した父に背後から支えられる、キリストの弛緩し湾曲した身体は、ロベール・カンパンによるエルミタージュ美術館油蔵彩画（1410 年頃）やウィーン美術史美術館蔵、金羊毛騎士団礼拝堂のための綴れ織り製祭壇アンテペンディウム（1440 年代）などの作例に代表されるネーデルラントを中心に発達した図像の系譜に連なるのは明らかである。図像の詳細な検討は今後の研究課題としたい。
- 21) マタイ伝 3:16-17 ; マルコ伝 1 :9-11 ; ルカ伝 3 :21-22。また、ヨハネ伝 1:31-34。
- 22) ただし、ハーグ写本の〈キリストの洗礼〉には、聖霊を象徴する白鳩が描かれていない。
- 23) ヤコブス・ダ・ヴォラギネ『黄金伝説』には、当初は聖バルバラの収録はなかった。15 世紀に流布していたフランス語版の聖バルバラ伝については、Williams 1975 参照。
- 24) 本写本の来歴は、以下のとおりである。バイエルン州ヴァイルハイム＝ショーンガウ郡ポリングのアウトグスティノ会修道院から、おそらく 1803 年の世俗化令の施行の伴ってバイエルン州立図書館へ移管された。フィリップ善良公の手を離れた経緯等それ以外の来歴は不明である。Catalogus codicum manu scriptorum Bibliothecae Regiae Monacensis, T. 7, 12, no. 78 参照。
- 25) ウィレム・ヴレランの彩飾に関連して Bousmanne 1997, 276-277（先行研究一覽）。パリのな様式の画家については、善良公の『エノ一年代記』（ベルギー王立図書館、KBR 9242-9244）の彩飾との比較との文脈で Van Buren 2000, 66-67 の論考を参照。
- 26) 当写本の電子版は、バイエルン州立図書館デジタルライブラリーで公開されている。<http://mdz-nbn-resolving.de/urn:nbn:de:bvb:12-bsb00095049-6>（2019 年 11 月 4 日アクセス）
- 27) 金羊毛騎士団の創設とリンブルクをブルゴーニュ公国領に加えたのが 1430 年である。Fol. 22 に描かれた大紋章には領土の拡大が反映されている。
- 28) ジャン無畏公が芸術庇護については、*L'art à la cour de Bourgogne* 2004 参照。
- 29) ジャン・ミエロのブルゴーニュ公の宮廷における翻訳家としての活動については、*Miniature flamande* 1959, 77-91, Lefèvre 1994, Wijsman 2010a 参照。
- 30) フランス国立図書館に入るまでの写本の来歴は不明である。<https://archivesetmanuscripts.bnf.fr/ark:/12148/cc436379> 参照（2019 年 11 月 7 日アクセス）。
- 31) 電子版は、<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52506043d>（2019 年 11 月 5 日アクセス）。
- 32) *Miniatures flamandes* 2011, ILLS. 140, 142, 147 が様式的に近似する。
- 33) 同祈祷文の由来については、黒岩 2014 および Le Brun-Gouanvic 1996, 2005 参照。
- 34) Büttner 2004, Rudy 2016 など。

#### 参考文献

*L'art à la cour de Bourgogne* (2004). *L'art à la cour de Bourgogne. Mécénat de Philippe le Hardi et de Jean sans Peur (1364-1419)*. (展覧会カタログ) Musée des Beaux-Arts de Dijon / The Cleveland Museum of Art.

- Bousmanne, B. (1997). « *Item a Guillaume Wyelant aussi enlumineur* » : *Willen Vrelant. Un aspect de l'enluminure dans les Pays-Bas méridionaux sous le mécénat des ducs de Bourgogne Philippe le Bon et Charles le Téméraire*. Bruxelles : Bibliothèque royale de Belgique/Turnhout : Brepols.
- Büttner, F.O. (2004). Sehen – verstehen – erleben. Besondere Redaktionen narrativer Ikonographie im Stundengebetbuch. In: Kaspersen, S. (ed.), *Images of cult and devotion: Function and reception of Christian images in medieval and post-medieval Europe*. Copenhagen: Museum Tusulanum Press/ University of Copenhagen, pp. 89–148.
- Catalogus codicum manuscritum Bibliothecae regiae monacensis*. Tomus VII. *Codices Gallicos, hispanicos, italicos, anglicos, suecicos, danicos, slavicos, esthnicos, hungaricos, complectens*. (Unveränderter Nachdruck der ausgabe von 1858), Wiesbaden, 1971.
- Chartes du chapitre de Sainte-Waudru de Mons*, (1913), Ghislain, J. & Mathieu, E.A. (eds.), T. 4. Bruxelles.
- Cockshaw, P. & Van den Bergen-Pantens, C. (2000). *Les Chroniques de Hainaut ou les ambitions d'un prince bourguignon*. Bruxelles: Bibliothèque royale de Belgique. Turnhout : Brepols.
- Dehaisnes, C. (1881). *Inventaire sommaire des archives départementales antérieures à 1790. Nord. Archives civiles. — Série B. Chambre des compte de Lille, Nos. 1842 à 2338. T. 4. Lille : Imprimerie L.Danel. [URL: [http://viewer-archivesdepartementales.lenord.fr/accounts/mnesys\\_ad59/datas/medias/inventaires/pdf8.pdf](http://viewer-archivesdepartementales.lenord.fr/accounts/mnesys_ad59/datas/medias/inventaires/pdf8.pdf) (2019年11月2日アクセス)*
- Dictionnaire des lettres françaises* (1994). *Dictionnaire des lettres françaises. Le Moyen Age. Edition revue et corrigée*. Hasenohr, G. & Zink, M. (eds.). Paris :Fayard.
- Dubois, A. (2018). Techniques picturales des grisailles dans les manuscrits enluminé des Pays-Bas méridionaux. In : Watteeuw, Van der Stock, Bousmanne, Vanwijnsberghe (eds.), pp. 233–247.
- Korteweg, A.S. (2002). The Book of Hours of Philip the Good, Duke of Burgundy, in The Hague and its later adaptation'. In: B. Cardon et al. (red.), “*Als ich can*”. *Liber amicorum in memory of professor dr. Maurits Smeyers*. Paris (etc.), Peeters, vol. 1 , 757–771.
- Krinsky, C.H. (2014). The Turin-Milan Hours: Revised Dating and Attribution, *JHNA* 6:2, DOI: 10.5092/jhna.2014.6.2.1 (2019年9月25日アクセス)
- Laborde, L. de (1851). *Les ducs de Bourgogne. Etudes sur les lettres, les arts et l'industrie pendant le XVe siècle et plus particulièrement dans les Pays-Bas et le Duché de Bougogne. 2e partie : Preuves. T. 2. Paris :*
- Le Brun-Gouanvic, C. (1996). *Ystoria sancti Thome de Aquino de Guillaume de Tocco (1323)*. Toronto : Pontifical Institute of Medieval Studies.
- Le Brun-Gouanvic, C. (2005). *L'histoire de saint Thomas d'Aquin de Guillaume de Tocco. Traduction française du dernier état du texte (1323) avec introduction et notes*. Paris : Cerf.
- Lefèvre, S. (1994). Jean Miélot. In : *Dictionnaire des Lettres françaises*, pp. 819–820.
- Leroquais, V. (1929). *Le bréviaire de Philippe le Bon. Bréviaire parisien du XVe siècle*. Paris-Bruxelles-New York.
- Miniature flamande* (1959). *Le siècle d'or de la miniature flamande. Le mécénat de Philippe le Bon*. (展覧会カタログ) Delaissé, L.M.J. (ed.), Palais des Beaux-arts, Bruxelles/Rijksmuseum, Amsterdam/Bibliothèque nationale, Paris.

- Miniatures flamandes* (2011). *Miniatures flamandes 1404–1482*. (展覧会カタログ) Bousmanne, B. & Delcourt, T. (dirs.), Bibliothèque nationale de France/Bibliothèque royale de Belgique.
- Rochmes, S.R. (2015–2016). Philip the Good's book of hours and the origins of a new court style. *Simiolus: Netherlandish Quarterly for the History of Art*. Vol. 38, No. 1/2, pp. 17–30.
- Rudy, K.M. (2016). Sewing the Body of Christ: Eucharist: Wafer Souvenirs Stitched into Fifteenth-Century Manuscripts, primarily in the Netherlands. *Journal of Historians of Netherlandish Art*. Vol. 8/1. DOI: 10.5092/jhna.2016.8.1.1
- Smeyers, M. (1995). An Eyckian Vera Icon in a Bruges book of hours ca.1450 (New York, Pierpont Morgan Library Ms.421), *Serta devota in memoriam Guillelmi Lourdaux. Pars posterior: Cultura medievalis*. Leuven: University of Leuven Press, 195–224.
- Van Buren A.H., Marrow, J.H., Pettenati, S. (1996). *Heures de Turin–Milan. Inv.No. 47, Museo civico d'arte antica, Torino. Kommentar/Commentary/Commentaire*. Luzern: Faksimile Verlag.
- Van Buren-Hagopian, Anne (2000). Les Chroniques de Hainaut: texte, histoire et illustrations. Artists of volume 1. *Les Chroniques de Hainaut ou les ambitions d'un prince bourguignon*, Cockshaw, P. (dir.), Van den Bergen-Pantens, C. (ed.), pp. 65–
- Vanwijnsberghe, D. & Verroken, E. (2018). Jean Le Tavernier: A reassessment of his biography and his work in the light of an unpublished book of hours. In: Watteeuw, Van der Stock, Bousmanne, Vanwijnsberghe (eds.), pp. 27–43.
- Watteeuw, L. & Van Bos, M. (2018). Black as ink. Materials and techniques in fifteenth-century Flemish grisaille illuminations by Jan de Tavernier, Willem Vrelant and Dreux Jehan. In: Watteeuw, Van der Stock, Bousmanne, Vanwijnsberghe (eds.), pp. 248–267.
- Watteeuw, L., Van der Stock, J., Bousmanne, B., Vanwijnsberghe, D. (eds.) (2018). *New perspectives on Flemish illumination*. Leuven: Peeters.
- Wijsman, H. (2010a). Jean Miélot et son réseau : L'insertion à la cour de Bourgogne du traducteur–copiste. In : *Le Moyen Français* 67, pp. 129–156.
- Wijsman, H. (2010b). *Luxury bound : Illustrated manuscript production and noble and princely book ownership in the Burgundian Netherlands (1400–1550)* (Burgundica XVI). Turnhout: Brepols.
- Williams, H.F. (1975). Old French Lives of St. Barbara. In: *Proceedings of the American Philisophical Society*, Vol. 119/2, pp. 156–185.
- 黒岩三恵 (2014) 「私的祈祷書類におけるイメージ機能の諸相：聖トマス・アクィナス図像と祈祷文の問題を中心に」『ことば・文化・コミュニケーション』6、49–86.
- 黒岩三恵 (2016) 「芸術庇護と信仰の私的実践とドミニコ会(1) — 『ベリー公の小さき時禱書』と『対抗教皇クレメンス7世の祈祷書』の場合 —」『ことば・文化・コミュニケーション』8、1–29.
- 黒岩三恵 (2018) 「『チェチリア・ゴンザーガの時禱書』：ルネサンス期イタリアの時禱書における人文主義と女性」『ことば・文化・コミュニケーション』10、33–73.
- ベスフルグ、F. & ケーニヒ、E. (2002) 『ベリー公のいともしき時禱書』(富永良子訳) 岩波書店、[原書 Boespflug, F. & König, E. (1998). « *Les Très Belles Heures* » de Jean de France, duc de Berry. Milano : Ulteyra/Antwerpen : Edizioni.]

**【附録1】『フィリップ善良公の時禱書』の祈禱文テキストと彩飾一覧（ff. 1-53 抜粋）**

[以下、クォーテーション・マーク “ ” は祈禱文本文抜粋、二重ギョメ « » は赤色標題見出し抜粋を示す。]

Ff.I-XII：典礼暦（1500年前後の後補：1500年の祈禱書の画家）

F. 1：挿絵〈聖パウロとペテロに挟まれ、聖顔布を広げる聖ヴェロニカ〉見出し「ヴェロニカの祈禱文」*Oroison de la Veronique.*（以下、全挿絵ジャン・ル＝タヴェルニエの助手）（図1）

F. 2：挿絵〈天秤で魂の善悪を計量する大天使ミカエル〉

F. 2v：見出し「大天使ミカエルへの祈禱文」« *Oroison a saint Michiel.* » **“Obsecro te Domine Pater spiritus angelice”**

F. 6 v：見出しなし「主の祈り」

F. 7 v：見出し「ある場所から離れたり出立したりしたい時に唱える記念文」« *Mémoire pour dire quant on vuest cheminer ou partir d'aucuns lieu.* »

F. 8：見出し「以下に、旅や都市やある場所の居住先から出立するときに唱えるべき文」« *Ces choses cy apres s'ensuient doivent estre dittes quant on commence a entrer en aucun voyage et a l'issue d'ung hostel d'une ville ou d'un lieu.* »

F. 10：挿絵〈受胎告知〉見出し「聖母への祈禱文」« *Oroison nostre dame.* » **“Excellentissima et gloriosissima atque sanctissima virgo semper Maria mater Domini”**

F. 11：見出し「以下にもう1編の聖母へのいと敬虔なる祈禱文」« *Cy apres s'ensieut une autre moust devote oroison a nostre dame.* »

F. 11v：挿絵〈聖母のエリザベツ訪問〉**“O gloriosa Domina que filium Dei portasti virgo peperisti et virginali lacte virginaliter eum lactasti.”**

F. 12：挿絵〈降誕〉**“Sancta Maria mater Domini Nostri Jesu Christi dulcissima in manus eusdem”**

F. 12v：見出し「肉欲に抗するための聖母への祈禱文」« *Autre oroison de Nostre Dame contre les temptations de la chair.* »

F. 13：挿絵〈寝室で幼児イエスをあやす聖母〉**“Fluat stilla de mamilla gloriose semper Marie virginis.”**

F. 13v：挿絵〈庭園で草地に坐す聖母子に豎琴を奏でる天使〉見出し「俗世の誘惑に抗するための祈禱文」**“De precor te Domina sanctissima per illam leticiam quam habuisti in illa nocte**

F. 14：挿絵〈聖霊降臨〉**“Veni, creator spiritus mentes tuorum visita imple superta gracia”**

F. 15v：挿絵〈恩寵の座〉見出し「以下に司教アタナシウスによる詩篇＝信条」« *Cy apres s'ensieut la psealme que fist Saint Anastaise evesque.* » 聖アタナシウス信条 **“Quicumque vult salvus esse ante omnia opus est ut teneat catholicam fidem”**

F. 18：挿絵〈キリストの洗礼〉見出し「以下に聖トマス・アクィナスが唱えし祈禱文」« *Cy commence une tres devote oroison que saint Thomas d'Aquin disoit.* » **“Concede michi**



## Misericors Deus” (図3)

- F. 19v : 挿絵〈聖バルバラの斬首〉見出し「聖バルバラの祈祷文」« *Oroison de sainte Barbe.* » “**O prudens et vigilans virgo qualis es cum sponso illo qui te elegit de mundo**” [ Cantus ID 203987 = 聖女カタリナの祭礼式文]
- F. 20 : 挿絵〈聖母とヨハネのいる磔刑；跪拝し祈るフィリップ善良公〉見出し「十字架上の主へのいと敬虔な祈祷文」« *Oroison moult devote a Nostre Seigneur pendant a sa croix.* » (図2)  
Ff. 20v : 十字架称賛 “**O crux gloriosa o crux admiranda …**” [Cantus ID 004018]
- F. 21 : 挿絵〈キリスト変容〉見出し「以下に聖アンセルムが作り給うた我らが主への敬虔なる祈祷文」« *S’enseut une devote oroison a Nostre Seigneur que fist saint Anselme.* » “**Tres puissant tres debonnaire tres chier tres doux tres ame tres bel Jesu mon Dieu mon refuge**”
- F. 21v : 挿絵〈エルサレム入城〉見出し「我らが主イエス・キリストへのさらなる祈祷文」« *Autre oroison a Nostre Seigneur Jhesu Crist.* » “**Sire Dieu, je tayne mais petit et tiedement, donne moy le don de te amer plus et plus ardamment.**”
- F. 22v : 見出し「祭壇の聖餐式を確立した最後の晩餐を執行する我らが主への祈祷文」« *Oroison a Nostre Seigneur et faisant la cene avecque ses disciples ou il establi le saint sacrement de l’ autel.* »
- F. 23 : 挿絵〈最後の晩餐〉“**Sauveur de noz ames doux Jhesu et songneux phisicien qui si angoisseusement suaz pour nous guarir qui tant**”
- F. 23v : 見出し「以下に同様に我らが主イエスに捧げるいと美しく敬虔なる祈祷文」« *Cy apres s’ensieut de ce mesmes a Nostre Seigneur Jhesu Crist une moult belle et tres devote oroison.* »
- F. 24 : 挿絵〈ゲツセマネの祈り〉“**Mon sire, a ta pitie je rens grace, car tu ne m’as pas laissie morir en pechie.**”
- F. 24v : 挿絵〈キリストの逮捕〉見出し「以下に同様な敬虔なる祈祷文」« *Cy apres s’ensieut de ce meismes une devote oroison.* »
- F. 25 : 挿絵〈手を洗うピラトの前のイエス・キリスト〉見出し「以下に同様な我らが主への祈祷文」 “**O pasteur, tres piteux ouquel est le tresor de sapience qui pour tes foles brebis te donna a mort**”
- Ff. 25v–26 見出し「以下に同様の敬虔なる祈祷文」« *Cy apres sensieut de ce mesmes devote oroison.* » 挿絵〈キリストの鞭打ち〉“**Haa mon sire, tres bel tres desirable mon Dieu ma vertu mon firmament mon refuge mon delivreur**”
- F. 26v : 挿絵〈十字架の道行き〉見出し「我らが主イエス・キリストが重き十字架を担う」« *Nostre Seigneur Jhesu Crist porte sa pesante croix.* » “**O tres doux Jhesu et tres bel duquel veoir sa tres glorieuse face**”
- F. 27rv : 見出し「跪拝してこの祈祷文を唱える者は皆教皇グレゴリウスより 2000 年のまことの贖宥が与えられる。栄えある処女マリアは 40 日遡って死を授けられる。この祈祷文は司祭パー

ダによって書かれた。我らが主イエス・キリストが十字架上で述べられた七つのみ言葉である。」  
« *Quiconques dira ceste oroison a genoulx flechiez le pape Gregoire luy donne deux mil ans de vray pardon. Et sa glorieuse vierge Marie luy donnera la mort par quarante jours devant. Et est ceste oroison de Bede prestre. Et sont les sept paroles que Nostre Seigneur Jhesu Crist dist en l' arbre de la croix.* »

F. 27v : (挿絵)〈磔刑〉“**Domine Jhesu Criste qui septem verba die ultimo vite tue in cruce pendens dixisti**”

F. 29 : 見出し「この祈禱文は四旬節中に我らが主イエス・キリストの受難の記念に唱えるのに有益である。新たな祈禱文」« *Et est ceste oroison moult prouffitable a dire en quaresme pour la souvenance de la passion de Jhesu Crist Nostre Seigneur. Autre oroison.* » “**Precor te piissime Domine Jhesu Criste propter illam caritatem qua tu rex cesestis dum pendebas in cruce**”

F. 29v : 挿絵〈十字架降下〉

F. 30 : 見出し「もう一編我らが主への敬虔なる祈禱文」« *Autre oroison devote a Nostre Seigneur.* » “**Domine Deus omnipotens pater et filius spiritus sanctus da michi famulo tuo. In victoriam contra inimicos**”

F. 32 : 見出し「もう一編我らが主への敬虔なる祈禱文」« *Autre oroison devote a Nostre Seigneur.* »

F. 32v : 挿絵〈キリストの埋葬〉“**Mon seigneur et mon Dieu, se jay fait pechie et suis vers toy coupable, je ne peux toutefois onques**”

F. 33 : 挿絵〈キリストの復活〉見出し「以下に我らが主の受難の短い観想。唱えるたびごとに30日間の贖宥が得られ、1370年に作詞された」« *Cy s'ensieut une briefve meditation de la passion Nostre Seigneur et chascune foiz que on la dist on geigne xxx jours de pardon et fut faitte l'an mil iij. c. lxx.* »

F. 33v : « *Oratio affectuosa Cristi passionem meditantis.* » “**Imperator celestium / Infernorum terrestrium / Deus et homo pariter**”

F. 35v : 見出し「以下にいと敬虔なる神への祈禱文」« *Cy apres s'ensieut une oroison moult devote a Dieu.* »

F. 36 : 挿絵〈キリストの再降臨：死者の復活〉見出し「祈禱文」« *Oroison* » “**Domine Deus omnipotens pie et clemens patiens initis ac multum misericors**”

F. 37v : 見出し「同じ祈禱文のフランス語訳」« *Oroison de ce mesmes en françois.* »

F. 39v : 挿絵〈荒野で祈るダヴィデ王〉“**S'ensieut aucunes devotes oroisons extraites du psaultier que David disoit es tribulations**”

F. 41v : 挿絵〈ミサを執行する司祭の後ろで跪拝し手を合わせるフィリップ善良公〉見出し「聖餐の前に唱えるべき祈禱文」« *Oroison a dire devant le sacrement.* » “**Mon tres debonnaire et tout puissant Dieu quant je desire et propose recevoir ton precieux corps**”

F. 43v : 挿絵〈聖体を拝領するフィリップ善良公〉見出し「イエス・キリストの身体を拝領する際

に唱える祈祷文」《*Oroison devote quant on recoit le corps de Jhesu Crist.*》“*Tout puissant et misericors Dieu, je viens maintenant au saint sacrement*”

F. 44v 挿絵：〈祭壇の前で祈るフィリップ善良公〉（図6）

F. 45：見出し「以下に我らが主の身体を拝領する際のいとも敬虔なる祈祷文」《*S'ensieut une moult devote oroison quant on a receu le corps de Nostre Seigneur.*》“*Je, povre pecheur rens graces et loenges a ta superlative largesse mon tres doux sauveur Jhesucrist*”

F. 45v：挿絵〈天蓋の下に座す聖母子に向かって祈るフィリップ善良公〉

F. 46：“*Salve, Regina misericordie vita dulcedo et spes nostra salve ad te clamamus exules filii*”

F. 46v：挿絵〈キリストの鞭打ち〉“*Quiconques dira tous les jours xv Pater Noster et xv Ave Maria, il dira en un an autant de fois Pater Noster et Ave Maria*”

F. 47v：〈聖母マリアと聖ヨハネを左右に配した磔刑像〉“*Sire Jhesucrist qui as prins ceste tres sacree char ou ventre de la glorieuse vierge Marie et l'arbre de la croix pour le salut des hommes.*”

F. 48：見出し「以下に同様のラテン語で書かれた祈祷文」《*S'ensieut ceste mesmes oroison faicte en latin.*》“*Domine Jhesucriste qui hanc sanctissima carnem de gloriose virginis Marie utero assumpsisti*”

F. 48v：挿絵〈玉座の聖母子の前で跪拝し祈るフィリップ善良公（粹上部に公のドヴィーズとモットー）〉見出し「聖母への祈祷文」《*Oroison a Nostre Dame.*》“*Je te prie Dame sainte Marie mere de Dieu tres plaine de pitie fille du souverain roy*”

F. 51v：挿絵〈幼児キリストを膝の上に立たせる玉座の聖母〉見出し「祈祷文」《*Oroison.*》“*O tres enterine et pardurablement benoite speciale et non comparable vierge mere de Dieu*”

Ff. 53a-53b：空白

Ff. 54 以下：週の曜日の時禱、聖母の小時課他（ジャン・ル＝タヴェルニエ）

[後略]

## 【附録2】《フィリップ善良公のいとも小さき祈祷文集》のテキストと彩飾の構成<sup>1)</sup>

装幀：濃褐色紙？製の表紙、表紙の四隅に金属の補強板、表紙に表裏各々5個の半球形の金属製装飾、2丁の金属製留め金。金属部分には七宝製植物文。いずれも近代以降の様式。天地・小口に金箔。

料紙：獣皮紙、379葉。

寸法・罫線レイアウト：不明・テキスト・コラム1列、12行。

[以下、クオーテーション・マーク “ ” は祈祷文本文抜粋、二重ギョメ « » は赤色標題見出し抜粋を示す。挿絵はアスタリスク \* が付されているものがウィレム・ヴレラント筆のものである。それ以外は「いとも小さき祈祷文集の画家」による。]

Ff. 1-3 : テクスト

F. 3v : (挿絵) 〈キリストの聖顔〉

Ff. 4- : “**Sallve sancta facies nostri redemptoris**”

Ff. 8-19v : 典礼暦

F. 10: 3月7日: 聖トマス・アクィナス (褐色インク)

F. 15v: 8月29日: 洗礼者ヨハネ斬首 (赤色インク)

\* 典礼暦にフランドルの聖人の記載なし?

F. 22 : (挿絵) 〈ドラゴンを退治する大天使ミカエル〉 (図像入り彩飾頭文字 O) 〈大天使を見上げ  
祈るフィリップ善良公〉 “**Obsecro te Domine Pater Spiritus angelice**”

F. 37v: « *Cy doibvt on dire .xv. foyz Ave Maria. Devote oroison Nostre Dame.* »

F. 38 : (挿絵) 〈受胎告知〉 “**O excellentissima et gloriosissima atque sanctissima Virgo**”

F. 42 : (挿絵) 〈聖母のエリザベツ訪問〉 “**O gloriosa Domina que filium Dei**”

F. 43v : (挿絵) 〈降誕〉 “**Sancta Maria mater Domini nostri Jhesu Crishi dulcesissima in manus**”

F. 45v : « *Aultre que oroison de Nostre Dame contre les temptations de la char.* »

F. 46 : (挿絵) 〈授乳する聖母〉 “**Fluat stilla de mamilla gloriose semper Marie virginis**”

F. 47v : « *Aultre oroison de Nostre Dame contre les temptacions de ce monde.* »

F. 48 : (挿絵) 〈庭園の謙讓の聖母子〉 “**De precor te, Domina Sanctissima par illam lecitiam**”

F. 49 : (挿絵) 〈聖霊降臨〉 “**Veni, Creator spiritus mentes tuorum**”

F. 54 : (挿絵) 〈神に懇願するダヴィデ王〉 “**Misere mei Deus secundum misericordiam tuam**”

F. 57v : « *S’ensuit la psaulme que fist saint Anastaise.* »

F. 58 : (挿絵) 〈恩寵の座〉 “**Quicumque vult salvus esse ante omnia opus est ut tenat  
catholicam fidem**”

F. 65 : « *Cy commence l’oroison saint Thomas d’Aquin.* »

F. 65v : (挿絵) 〈キリストの洗礼〉 “**Concede michi Miserocors Deus que tibi placeta sunt**” (図  
5)

F. 70v : (挿絵) 〈緑地に坐す聖バルバラ〉 “**O prudens et vigilans virgo qualis es cum sponso illo**”

F. 72 : « *Devote oroison a dire devant Nostre Dame et touchant la passion de son cuer quant elle  
veist Nostre Seigneur pendu en l’arbre de la croix.* »

F. 72v : (挿絵) 〈キリストを見上げ嘆く聖母、跪拝し祈るフィリップ善良公〉 “**Stabat Mater  
dolorosa juxta crucem lacrimosa**” (図 4)

F. 75v : « *S’ensiut devote oroison a Nostre Seigneur Jhesu Crist que feist St. Anselme.* »

F. 76 : (挿絵) 〈キリストの変容〉 “**Tres puissant, tres debonnaire, tres cher, tres doulz, tres ame,  
tres bel**”

F. 78 : (挿絵) 〈エルサレム入城〉 “**Sire Dieu je te amme mais petit et tiedement . Donne moy le  
don de toy**”

- F. 81 : (挿絵) 〈最後の晩餐〉“*Sauvez de noz ames doulz Jhesu et soigneur phisicien qui si angoisseusement su az por nous garir.*”
- F. 83v : (挿絵) 〈ゲツセマネの祈り〉“*Bon sire a ta pitie je rens grace, car tu ne m’as pas laisse morir en pechie*”
- F. 86 : (挿絵) 〈キリストの逮捕〉“*O Pasteur tres piteux, ou quel est le tres for de sapience qui pour tes foles brebis te donnas a mort*”
- F. 87v : (挿絵) 〈ピラトの前のキリスト〉“*O fontaine de vie et de toute douceur en laquelle prennent tous les esperits celestes habondamment et souverainement*”
- F. 89v : (挿絵) 〈キリストの鞭打ち〉“*Haa, mon sire tres desirable mon Dieu, ma vertu, mon firmament, mon refuge, mon delivreur, mon aideur, mon defendeur*”
- F. 91v : (挿絵) 〈十字架の道行き〉“*Tres doulz Jhesu et tres bel duquel veoir la tres glorieuse face est accomplissement de tous desires*”
- F. 93v : « *quiconques dira ceste oroison a genoux flexes le pape Gregoire luy donne .ij. mil ans de vray pardon et la Vierge Marie denoncera sa mort par .xl. jors devant. Et est l’orison de Bede prestre et sont les paroles .vij. que Nostre Sauveur dist en l’abre de la croix.* »
- F. 94 : (挿絵) 〈磔刑〉(図像入り彩飾頭文字D) 〈骰子でキリストの衣服を取り合う兵士〉“*Domine Jhesu Criste qui septem verba die ultimo vite tue in cruce pendens dixiti*”
- F. 98v : « *Et est moult porfitable a dire en quaesme pour la souvenance de la passion de Nostre Seigneur Jhesu Crist. Oroison.* » “*Precor te piissime Domine Jesu Criste propter illam caritatem*”
- F. 100v : (挿絵) 〈十字架降下〉“*Domine Deus omnipotens Pater et Filius et Sanctus Spiritus da michi famulo tuo.*”
- F. 108v : (挿絵) 〈キリストの埋葬〉“*Mon Seigneur et mon Dieu se j’ay fait pechie et suy vers toy coupable, je ne peuz touteffoys oncques tant faire.*”
- F. 110v : « *Briefve meditation de la passion Nostre Seigneur. Oratio affectuosa Cristi passonem meditantis.* »
- F. 111 : (挿絵) 〈聖墳墓の3人のマリア〉“*Imperator celestium infernorum terrestrium Deus et homo paritus*”
- F. 116v : (挿絵) 〈キリスト昇天〉“*Domine Deus omnipotens pie clemens paciens imtis ac multum misericors respice*”
- F. 121v : (挿絵) 〈キリスト再降臨・死者の復活〉“*Juste et vray juge Jhesu Criste roy des roys et seigneur des seigneurs qui tous jours regnes avecques le père et le saint esperit*”
- F. 126r-v : « *S’ensuivent devotes oroisons extraites du psaultier lesquelles David disoit es tribulations et adunsitez qui luy survenoyent et lesquelles Dieu avoit agreables et presentement les exaulsoit et encores feront qui icelles devotement droict en ses necessitez. Oroison.* »

- F. 127 : (挿絵) 〈剣を差し出す天使に顔を向けて祈るダヴィデ王〉 **“Domine non secundum peccata nostra facias nobis neque secundum iniquitates”**
- F. 133 : *« Oroison a dire devant le Sacrement. »*
- F. 133v : (挿絵) 〈聖体を奉挙する司祭の背後で祈る黒衣のフィリップ善良公〉 **“Mon tres debonnaire et tout puissant”**
- F. 140v : *« Oroison quant on le recoit. »*
- F. 141 : (挿絵) 〈聖体を拝領する黒衣のフィリップ善良公〉 **“Tout puissant et misericors Dieu je viens maintenant”**
- F. 143v : *« S’ensieut devote oraison a dire quant on a receu le corps Nostre Seigneur. »*
- F. 144 : (挿絵) 〈祭壇に向かって祈る黒衣のフィリップ善良公〉 **“Je povre pecheur rens graces et laenges a ta superative largesse mon tres doulz sauveur Jhesu Crist.”**
- F. 148v : 空白
- F. 149rv : *« Pape Innocent et Pape Boniface ont ottroye a tout ceulx qui diront ceste oraison iij c. jours de pardon. Et soit certains qui devotement la dira chascun jour acoustument, il verra en le fin de la maladie de sa mort la glorieuse Vierge Marie, qui luy sera aidans et confortans encontre les mauvais ennemis d’enfer. Et est ceste oraison nommee Obsecro, laquelle est translatee en françois. »*
- F. 150 : (挿絵) 〈聖母の戴冠〉 **“Je te prie Dame sainte Marie mere de Dieu pleine de pitie.”**
- F. 158 : (挿絵) 〈聖人たちに囲まれた恩寵の座〉 **“Salvator Mundi salva nos omnes sancta dei genetrix virgo semper Maria”**
- Ff. 160v–161 : *« Quiconques dira tous les jours de l’an .xv. Pater Noster et .xv. Ave Maria, il dira en ung an autant de fois Pater Noster et Ave Maria que Nostre Seigneur Jhesu Crist eut de playes en son precieux corps c’est a savoir v. mil. cccc. lxxv. Cy apres s’en suit l’oroison que on doit dire apres le Pater Noster et Ave Maria. Oroison. »*
- F. 161v : (挿絵) 〈キリストの鞭打ち〉 **“Seigneur Jhesu Crist, filz de Dieu vivant je te presente”**
- F.f163v–164 : *«Le pape Boniface Vle ottroya aux prieres de Philippe roy de France et donna a tous vrais confes et repentans qui devotement diront ceste oraison apres la levation du corps Nostre Seigneur Jhesu Crist, deux mil ans de pardons, lequels il conferma par ses bulles. S’ensuit donc la tres devote oroisson a Nostre Seigneur Jhesu Crist. Oroison. »*
- F. 164v : (挿絵) 〈磔刑〉 **“Sire Jhesu Crist qui a prins ceste tres sacree char ou ventre de la tres glorieuse vierge Marie”**
- F. 173 : (挿絵) \* 〈聖母の戴冠〉 *« Ad vesperas beate virginis Marie. »*
- F. 240 : **“Domine ne in fuore tuo argua me, neque in ira tua corripias me.”** (挿絵) \* 〈キリストの再降臨・死者の復活〉
- F. 271 : (挿絵) \* 〈死者のための聖務日課〉 **“Placebo” “Dilexi quoniam exaudiet Deus”**

F. 315v: (挿絵) \* 〈太陽を着月を踏む聖母子〉 « *Secuntur vij gaudia beate virginis Marie.* » “*Gaude flore virginali que honore speciali.*”

Ff. 319- : 聖人請願

F. 337v : « *Secuatur septem versiculi sancti Bernardii* » “*Illmina oculos meos neumque ob dormiam in morte*”

F. 342: «*Clemens papa quintus dedit remissionem negligentiarum in horis canonicis istam orationem sequentem devote legantibus in fine horarum oratio.* » “*Sancte et individue trinitati Jesu Cristi Crucifixe humanitati beate virgini*”

Fols. 349v-350 : [後補 : 第2の写字生] “*Habeo de sancto Thoma de Aquino. O Thomas laus et gloria predicatorum ordinis nors transfer ad celestia professor sacri numiniis, ora pro nobis beate Thoma, ut dig’, efficiamus purissionibus Cristi. [ D ] eus /oratio/ qui ecclesiam tuam mira beati Thome confessoris tui erudicione clarificatas et sancta operatione fecundas, tribue nobis quesumus et que docuit intellectam conspiciere et que egit immitatione comple. Per Cristum*”

F. 350v: 空白

F. 351 : « *S’ensieuent les .xv. psaulmes avec leurs suffrages lesquelles doibvent dire per ordre aussi qu’il est cy apres mis. En lieu des heures Nostre Dame aus jors qu’on fait d’elle selon l’ordre et usage de saint Dominique.* » “*Ad Dominum cum tribularer clamavi et erandunt me*”

F. 375: [後補 : 第3の写字生] 祈祷文

### 【附録3】ジャン・ミエロ訳編『古の哲学者たちによる道徳論集』テキストと彩飾の構成<sup>2)</sup>

(BnF Fr. 12441 *Moralités et opuscules ascétiques*)

装幀：黄褐色の皮革製の表紙。

料紙：獣皮紙 116 葉 (フランス国立図書館の電子カタログでは紙と記載)

寸法・罫線レイアウト：29 × 20 cm. テキスト・コラム 1 列、20 行

写字生：在リールの写学生

折丁構成：I(ff. 1-8v), II(9-16v), III(17-24v), IV(25-32v), V(33-40v ?)\*, VI(41-43v ?)\*, VII(44-51v), VIII(52-59v), IX(60-67v), X(68-74v?)\*, XI(75-82v), XII(83-90v), XIII(91-98v), XIV(99-106v?)\*, XV(107-114v?)\*, XVI(115-フォリオ番号なし 2 葉?)\*. [アスタリスク \* は、レクレム記載のない折丁を示す。]

[鈎カッコ「」内には、赤色標題の和訳、続いて二重ギユメ«」内に同標題原文の翻刻、コーテーション・マーク“ ”内に本文テキスト冒頭の翻刻を表記する。]

F. 1rv : 「本論の道徳論という題の命名について」« *Intitulation de ce traitté appellé moralitez.* »

(挿絵) 〈書斎のジャン・ミエロ〉 (ジャン・ル=タヴェルニエ)

Ff. 2-4 : 「著者による道徳論に関する序文」« *Prologue de l’acteur sur son livre de moralité.*»

(挿絵)〈寝室で眠り込む著者の周囲に立ち並んで議論をする11人の学者たち〉(ジャン・ル＝タヴェルニエ)

#### Ff. 4-43 : 哲学者たちによる道徳論

F. 4 : 「数人の哲学者から抜粋した道徳論、ここより始まる」 « *Cy commence ung traittié extrait de pluseurs philosophes.* »

F. 4v : 「正直さについて」 « *De honnesteté.* »

F. 6 : 「慎重さについて」 « *De pourveance.* »

F. 8 : 「敬意について」 « *De esgard.* »

「偽善について」 « *De eschievement.* »

F. 8v : 「教育について」 « *De enseignement.* »

F. 10 : 「実直さについて」 « *De droitture.* »

F. 10v : 「残酷さの徳について」 « *De la vertu de la cruauté.* »

F. 11v : 「率直さについて」 « *De la franchise.* »

F. 14 : 「義務について」 « *Des services.* »

F. 17 : 「鷹揚さについて」 « *De largesse.* »

F. 18v : 「宗教について」 « *De religion.* »

F. 19 : 「憐憫について」 « *De pitié.* »

F. 20 : 「無垢について」 « *De innocence.* »

F. 20v : 「友情の徳について」 « *De la vertu d'amistié.* »

F. 21 : 「高潔さについて」 « *De honnourableté.* »

F. 21v : 「和合の徳について」 « *De la vertue de concorde.* »

F. 22 : 「慈愛について」 « *De miséricorde.* »

F. 23v : 「活力について」 « *De vigueur.* »

F. 24 : 「約束の徳について」 « *De la vertu de fiance.* »

F. 26 : 「恒常性について」 « *De permanence.* »

F. 26v : 「苦悩について」 « *De souffrance.* »

F. 27 : 「節度について」 « *De mesure.* »

F. 28v : 「羞恥心について」 « *De vergogne.* »

F. 29 : 「禁欲、寛容、正直の徳について」 « *De la vertu de abstinence, espargnableté, et honnesteté.* »

F. 31 : 「有益なものごとについて」 « *De chose prouffitable.* »

F. 32v : 「城館について」 « *Des edefices.* »

F. 33v : 「家臣について」 « *Des maisniés.* »

F. 37 : 「節制について」 « *De attempérence.* »

F. 41v : 「この小著の目次」



F. 43v : 空白

**Ff. 44–65 : キリスト受難の七つの時課論**

F. 44 : 「著者による序文」*« Prologue de l'acteur. »*

(挿絵) 祭壇前で跪拝し祈るフィリップ善良公 (ジャン・ル＝タヴェルニエ) (図 6)

F. 44v : 「ここよりキリスト受難の七つの時課に関する敬虔なる観想始まる」*« Cy commence aucunes tres dévotes contemplations sur les .vij. herres de la Passion. »*

F. 45 : 「我らが主イエス・キリストの最後の晩餐について」*« De la cène Nostre Seigneur Jhésucrist. »*

(挿絵) 〈キリスト受難の七場面〉 (ジャン・ル＝タヴェルニエ工房)

F. 47v : 「以下に朝課」*« S'ensieut l'heure de matines. »* “A l'heure de matines mon tres doubtte Seigneur vous vous reveillerez de vrey sompne et serez lors plein de larmes”

F. 50 : 「以下に一時課」*« S'ensieut l'heure de prime. »* “A l'heure de prime mon tres doubtte Signer vous contemplerez de cuer douloureux et triste”

F. 52 : 「以下に三時課」*« S'ensieut l'heure de tierce. »* “A l'heure de tierce vous contemplerez mon tres doubtte Seigneur triste douloureux et quoy, comment la voix court”

F. 55 : 「以下に六時課」*« S'ensieut l'heure de midy. »* “A l'heure de midi vous contemplerez mon tres doubtte Seigneur dolent et triste comment Jhesucrist s'en aloit”

F. 59 : 「以下に九時課」*« S'ensieut l'heure de nonne. »* “A l'heure de nonne vous contemplerez mon tres doubtte Seigneur de cuer triste”

F. 61 : 「以下に晩課」*« S'ensieut l'heure de vespres. »* “A l'heure de vespres vous venderez mon tres doubtte Seigneur en devotz mouvements et vous approcherez en esprituelz abordements”

F. 63 : 「以下に終課」*« S'ensieut l'heure de complie. »* “A l'heure de complie dont il est ja dit en partie a l'heure de vespres vous vendrez adoncques mon tres doubtte Seigneur”

**Ff. 65–74 : フランス語格言集**

F. 65 : 「以下にアルファベット順にフランス語の格言」*« Cy après s'ensieuvent plus proverbes en françois et procèdent selon l'ordre de a. b. c. »*

F. 74v : 空白

**Ff. 75–113 : 善き死のための小論・祈祷文他**

F. 75 : 「ここより善く死ぬための小論はじまる」*« Cy comment ung petit traittié de la science de bien morir. »*

F. 82v : 「第二部は死者が死の死に際に感ずる誘惑について」*« La seconde partie est de cmus temptations que ceulz qui meurent ont en l'article de la mort. »*

F. 92v : 「第三部は、死者に対して行われるべき尋問について」*« La tierce partie est d'aucunes interrogations qui se doivent faire a ceulz qui meurent. »*

F. 96 : 「第四部は、数編の訓令と祈祷文」*« La quarte partie contient aucunes instructions et prières. »*

F. 99 : 「第五部は、臨終の床にある者に対して行うべき励ましについて」*« La quinte partie est des exhortations qu'on doit faire a ceulz qui sont en l'article de la mort. »*

F. 104v : 「第六部は、死の苦しみにある病人に対して唱える祈祷文」*« La sisième partie est des oroisons qui peuvent estre dittes sur ung malade labourant en l'article de la mort. »*

F. 105v : 「ここより病気の俗人に唱える上述の祈祷文はじまる」*« Cy commencent les dittes oroisons qui se dient aux malades séculiers. »*

F. 106v : 「以下に死にゆく者への臨終の祈祷」*« S'ensieut une recommandation ou oroison por ceulx qui meurent. »*

F. 107 : 「大天使ミカエルへの祈祷」*« Oroison à Saint Michiel archangele. »*

「神の母栄えある処女マリアへの祈祷」*« Autre oroison à la glorieuse Vierge Marie Mère de Dieu. »*

F. 107v : 「我が主への敬虔なる祈祷」*« Autre dévotte oroison à Nostre Seigneur. »*

F. 108 : 「敬虔なる祈祷」*« Autre dévotte oroison. »*

F. 108v : 「臨終の祈り」*« Recommandation. »*

F. 109v : 「死者の魂の創造主への推薦の祈祷」*« Recommandation de l'ame à Dieu son créateur. »*

F. 111v : 「以下に主の祈りの3回の詠唱の形式」*« S'ensieut la fourme de l'exécution des trois Pater Noster. »*

F. 113v : 「この書物のむすび」*« La conclusion de ce livre. »*

F. 114v : 「これを以て、フランドルはリールの在俗聖職者ジャン・ミエロがラテン語から簡明なフランス語に1456年に翻訳せし善き死去の論終わる。」*« Cy fine le traittié de la science de bien morir translaté de latin en cler françois par .Jo. Miélot Chanoine de Lille en Flandres et fu achevé l'an mil quatrecentz cinquante et six. »*

「以下、聖母マリア礼拝堂司祭聖ベルナルドゥスより与えられし短き教義」*« Cy après s'ensieut brièfve doctrine donnée par saint Bernard chappellain à Nostre Dame. »*

F. 115 : 「聖トマス・アクィナスは以下に続く祈祷文を、我らが主に語りかけて作詞された」*« Saint Thomas d'Aquin fist ceste oroison qui s'ensieut en parlant à Nostre Seigneur. »*

## 注

1) この附録2は、バイエルン州立図書館デジタルライブラリーにおける閲覧に基づく。

2) この附録3は、フランス国立図書館ウェブサイト Gallica 上の写本電子版の閲覧に基づく。寸法、素材については同図書館カタログも参照した。